

紫房の異種

根 間 弘 海*

1. 目的

本稿では、明治時代の立行司軍配の房色「紫」に関連することを論じる¹。
具体的には、主として次の4点である²。

- (a) 16代木村庄之助と6代木村瀬平の准紫はいつ許されたか。紫白が先に許され、その後に准紫が許されたのか。それとも最初から准紫だったのか。
- (b) 15代木村庄之助の准紫は明治31年（明治30年：拙稿）に許されたとする文献がいくつかあるが、それは本当だろうか。それまでは紫白だったのだろうか。
- (c) 14代木村庄之助が「紫」を許されたとする明治時代の新聞や本はないが、本当に使用していなかったのだろうか。
- (d) 8代式守伊之助は明治30年春場所7日目（2月17日）に「紫」を許されている。それは「准紫」だったのだろうか、それとも「紫白」だったのだろうか。

「紫」と言っても、それにはいくつか異種がある。説明の便宜上、次のようにその異種を区分する。

*専修大学名誉教授

- (1) 総紫：紫糸のみの房である。現在の木村庄之助は総紫の房である。明治43年5月以前は「総紫」を使用した形跡はない³。そのため、この総紫は、本稿では扱わない。
- (2) 紫白：白糸が混じっているもの。紫糸と白糸の割合によって、異種がある。
 - (a) 准紫：白糸が1本ないし3本くらい混じったもの。一見すると、総紫である。これは「総紫」の一種だと分類することもできるが、白糸が混じっていることから、本稿では「紫白」の一種として扱う。明治43年まではこの准紫が最高位の房色である⁴。
 - (b) 真紫白：白糸が数十本混じったもの。これは現在の式守伊之助の房色に近似するものである。紫糸と白糸の割合は必ずしも明確でないが、一見して、白糸が少し混じっていることがわかる「紫」だったに違いない。一般に「紫白」という場合、この「真紫白」を指す。
 - (c) 半々紫白：白糸と紫糸が同じくらいの割合で混じったもの。これは、明治末期から大正末期までの准立行司（あるいは立行司格）や昭和34年11月まで副立行司が使用していた房色である⁵。明治30年代までも「半々紫白」は使用されていた可能性がある。相撲協会だけの許しを受けた「紫白」があったという新聞記事が散見されるからである⁶。吉田司家は文書で正式の行司免許を出すのではなく、非公式に黙認していたようだ。しかし、本稿では、明治30年以前の「半々紫白」は存在していた可能性を認めながらも、やはり「真紫白」として分類する。「半々紫白」と確認できる証拠が乏しいからである。

吉田司家が立行司に授与した行司免許状には「紫」の房色は「紫白打交紐」という表現になっている⁷。この「紫白打交紐」が、実際は、「准紫」だったのか、それとも「真紫白」だったのかは、必ずしもはっきりしない。紫糸と白糸の割合が免許状からは何もわからない。しかし、新聞記事や本などの文献では、「紫白」というより「紫」として記述されていることが

多い。そのために、実際は、「准紫」と「紫白」のいずれであるか、その見極めが難しくなる。もちろん、「総紫」ということはない。本稿では、吉田司家の行司免許状の「紫白打交紐」は、「真紫白」だったとしている。

行司の階級と房色が明確になった明治43年5月でも立行司の房色は「紫」と呼ぶのが一般的だった。つまり、厳密には二種の「紫」があったにもかかわらず、一括りにして共に「紫」と呼んでいたのである。従って、その「紫」が「准紫」なのか「真紫白」なのかを見極めることは、ほとんど無理ということになる。その慣行は大正時代や昭和時代でもときおり見受けられる。

「准紫」と「真紫白」を一括りにして「紫」と呼ぶ慣行があったために、「准紫」と「真紫白」の区別がわからなくなっただけではない。「真紫白」から「准紫」になったのが「いつ」なのかもわからなくなった。また、「紫白」から「准紫」に変わったのではなく、最初から「准紫」を許されていたという見方も生じる。本稿ではいずれが妥当な見方かを調べ、初めは「真紫白」だったが後に「准紫」になったという見方を提示する。問題はいつ「真紫白」から「准紫」になったかであるが、本稿では明確に答えを提示できていない。

2. 16代木村庄之助と6代木村瀬平の紫

2.1 16代木村庄之助の紫

15代木村庄之助が明治30年9月に死去したため、木村誠道がその後を継ぎ、明治31年1月場所の番付から16代木村庄之助となり、吉田司家から紫房を許されている⁸。

(a) 上司編『相撲新書』(M32.1)⁹

「明治31年3月肥後国熊本に至り、吉田家の門に入りて角力行司秘術皆伝の

免許を得、麻上下、木剣、紫房を許されたりという」(p.88)

- (b) 酒井著『日本相撲史(中)』(S39)

「(前略)(木村誠道は：拙稿)去年庄之助が没するに及んで16代庄之助を継ぎ、吉田家から皆伝免許、紫房を許された」(p.155)

2.2 6代木村瀬平の紫

木村瀬平は明治32年3月に紫を許されている。本場所の使用は5月である。この紫について記述している文献はたくさんあるが、そのいくつかを示す。

- (a) 『読売新聞』(M32.3.16)の「木村瀬平、紫房を免許せらる」

「東京相撲立行司木村瀬平がかねて志望なる軍扇の紫房はいよいよ一作14日免許を得て小錦の方屋入を曳きたる(後略)」

- (b) 『報知新聞』(M32.5.18)の「行司の紫房、司家より庄之助らに許可」

「<行司紫房の古式> 相撲行司の所持する紫房は、古より難しき式法のあ
るものにて、これまでこれを許可されしは、13代木村庄之助が肥後の司家吉
田追風より許可されしを初めとし、これより後本式の許可を得たる者なかり
しに、先ごろ死去したる15代木村庄之助が、再びその許可を得たり。されど
こは単に相撲協会より許されしにて、吉田追風より格式を許されしにあらざ
りしが、今回大場所に勤むる木村庄之助(16代：拙稿)及び瀬兵衛(6代瀬
平：拙稿)の二人は、吉田家及び相撲協会より、古式の紫房を許可せられ、
今回の大場所に勤むるにつき、(後略)」¹⁰

2.3 真紫白から准紫へ

これらの文献からわかるように、16代木村庄之助は明治31年1月、それ

から、6代木村瀬平は明治32年5月、それぞれ「紫」を許されている。その「紫」は文字どおり「准紫」だろうか、それとも「真紫白」だろうか¹¹。本稿では、少なくとも二つの見方があると仮定する。

一つの見方は、最初から准紫だったとするものである¹²。これを便宜的に「一回説」と呼ぶことにする。もう一つの見方は、最初は「真紫白」だったが、後で准紫を許されたとするものである。これをやはり便宜的に「二回説」と呼ぶことにする。本稿では、二回説の見方をしている。その根拠をこれから見ていく。たとえば、次のような新聞記事がある。

(a) 『読売新聞』(M31.6.1)の「相撲だより」

「大場所中木村庄之助は軍扇に紫房，木村瀬平・式守伊之助両人は紫白打交
房免許（中略）を協会へ請願したるため」

これは過去のことを述べたものではなく、これから生じることを期待した記事である。16代庄之助はこれから「紫」（厳密には「准紫」）を使用したいのでそれを許してほしいという請願をしている。1月に許された「紫」が「准紫」だったなら、そのような請願をすることはありえない。同時に、1月に許された房色は「真紫白」だったこともわかる。

それが未来の房使用の請願であることは、6代木村瀬平と9代式守伊之助の請願で確認できる。両立行司とも「紫白」を請願している。当時、両立行司は「紫白」を許されていなかった。6代木村瀬平が「紫」を許されたのは、翌32年3月（本場所は5月）である。それまでは、おそらく、「赤」だったに違いない¹³。この請願から、当時、すでに「准紫」と「真紫白」の区別があったこともわかる。木村瀬平が16代木村庄之助と同じ「紫」を請願しなかったのは、庄之助がすでに「真紫白」を使用していたからである。庄之助が「紫」（厳密には「准紫」）を請願しているのに、同じ「紫」（厳密には「准紫」）を請願するわけにはいかないはずだ。

興味深いのは、9代式守伊之助も「真紫白」を請願していることである。これも当時、式守伊之助が「真紫白」を使用していなかったことを示唆している¹⁴。この請願した「真紫白」を協会が受けつけたかどうかはわからない。協会が受けつけたにしても、結果的に、吉田司家が拒否している。なぜなら、この9代式守伊之助が「真紫白」を許されたのは、明治37年5月だからである。

(b) 『都新聞』(M37.5.29)の「紫白の房と上草履」

「行司式守伊之助は昨日より紫白混じり房、同木村庄三郎は土俵の上草履使用、いずれも協会より免されたり」¹⁵

明治31年6月に木村瀬平が「真紫白」を請願していることが事実であるなら、明治32年3月に許された「紫」は「准紫」ではなく、「真紫白」である可能性が高い。31年6月に「真紫白」を請願したのに、吉田司家が翌32年3月にそれより上位の「准紫」を許すのは不自然である。明治32年3月は「真紫白」だったが、後に改めて「准紫」が許されたと見るのが自然である。すなわち、二回説が自然な見方である。

三木・山田編『相撲大観』(M35)によると、木村庄之助と木村瀬平は共に「准紫」を使用している¹⁶。

(c) 三木・山田編『相撲大観』(M35)¹⁷

「紫房は先代(15代:拙稿)木村庄之助が一代限り行司宗家、肥後の熊本なる吉田氏よりして特免されたるものにて、現今の庄之助(16代:拙稿)および瀬平もまたこれを用いるといえども、その内に1、2本の白色を交えおれり」(p.300)¹⁸

明治30年代になっても白糸がわずかばかり混じった「准紫房」しか許さ

れていなかったとすれば、それ以前のいわゆる「紫房」は、実際は、「准紫」だったかもしれない。もしこれが真実だとすれば、8代木村庄之助や13代木村庄之助の「紫房」は「准紫」か「真紫白」だったことになる。いずれにしても、明治30年以前の「紫房」が「総紫」だったのか、それとも白糸が混じった「准紫」か「真紫白」だったかに関しては、もっと調べる必要がある。

2.4 間接資料

木村庄之助と木村瀬平が初めは「真紫白」だったが、後に「准紫」を許されたなら、いつ「准紫」になっただろうか。実は、その時期をズバリ特定できる資料を見たことがない。その時期を特定するには、当時の資料から間接的に推定する以外にない。その資料をいくつか示す。

(1) 大橋編『相撲と芝居』（博文館、M33）

「（前略）これからもう一つ進むと、土俵の上で草履を用いることを許される。これは力士の大関と同格で鬘斗目麻上下に緋房の軍扇あるいはもう一つ上の緋と紫と染め分けの房のついた軍扇を用いるが¹⁹、この中で一人木村庄之助だけは、特別に紫房の軍扇を許される。紫房は行司の最高級で、ほとんど力士の横綱の如きものである。土俵の上で草履を用いる行司は、前にも言った通り、力士の大関と同格だから、大関の相撲でなければ出ない。これは昔から木村庄之助、式守伊之助の兩人に決まっていたが、近年この高級行司が三人もあることがあって、現に今でも庄之助、伊之助の他に木村瀬平を合わせて三人ある。」
(p. 43)²⁰

「緋と紫の染め分けの房」が「紫白」を指しているかどうかで意見が分かれるが、本稿では「紫白」として解釈している。そのように解釈すると、木村庄之助は准紫であり、木村瀬平と式守伊之助は紫白である。この本は

明治33年5月に発行されているので、明治33年1月場所までにはすでにこの房色だったことになる。この年月を考慮すると、次のようになる。

(a) 木村庄之助の場合

木村庄之助は明治31年6月の時点ではまだ「真紫白」だった。それが明治33年1月には准紫になっている。ということは、木村庄之助が准紫に変わったのは明治32年1月から33年1月の間である。厳密な期日までは特定できないが、准紫になったのは「明治32年中」としても大きく間違っていないはずだ。

(b) 木村瀬平の場合

木村瀬平は明治32年3月（本場所では5月）に「紫白」になっている。明治33年1月の時点でもまだ「真紫白」である。しかし、三木・山田編『相撲大観』（M35）で述べられているように、木村瀬平は木村庄之助と同様に准紫を使用している。この『相撲大観』は明治35年12月の発行になっている。ということは、木村瀬平は明治33年5月から明治35年5月の間に准紫に変わったことになる。その間に一つ興味を引く出来事があることから、その時に准紫も許されたかもしれない。それは明治34年4月である²¹。

(2) 『読売新聞』（M34.4.8）の「木村瀬平以下行司の名誉」

「大相撲組熊本興行中、吉田追風は木村瀬平に対し一代限り麻上下鬘斗目並びに紫房の免許を与え、式守伊之助には麻上下鬘斗目赤房免許を、木村庄三郎、同庄太郎には赤房を、式守与太夫、同勘太夫、木村宋四郎、同大蔵、式守錦太夫、同錦之助には足袋並びに紅白の房をいずれも免許したり」

明治33年5月から35年5月の間に木村瀬平が准紫を許されたことは間違いないが、明治34年4月に准紫を許されたかどうかは必ずしも明白でな

い²²。もし明治34年4月に准紫になっていなければ、それは34年4月から35年5月の間ということになる。本稿では、明治34年4月に木村瀬平が「一代限りの立行司」も授与されていることから、その時に「准紫」も許されたはずだと推測している。

大橋編『相撲と芝居』（博文館、M33）では9代式守伊之助も「真紫白」を使用していたような記述になっているが、これは事実と反しているはずだ。というのは、明治34年4月の新聞記事でも9代式守伊之助に「赤」の免許が授与されているからである。さらに、9代式守伊之助が「真紫白」を許されたのは、明治37年5月である²³。

(3) 『報知新聞』（M32.5.18）の「行司の紫房、司家より庄之助に許可」

「今回大場所に勤むる木村庄之助（16代：拙稿）及び瀬兵衛（6代：拙稿）の二人は、吉田家及び相撲協会より、古式の紫房を許可せられ、今回の大場所に勤むるにつき、（後略）」

この記事の「古式の紫房」とは何を指しているのだろうか。「准紫」なのだろうか、それとも「真紫白」なのだろうか。どの「紫」を指すかによって見方が異なる。さらに、木村庄之助と木村瀬平に同時に「紫」を許されたのか、そうでなかったのかによっても見方が異なる。

もし「紫」が「准紫」を指しているなら、木村瀬平は「真紫白」を使用していないことになる。なぜなら、その紫は明治32年3月に許されており、5月の本場所でそれを使用することになっていたからである。木村瀬平はいきなり「准紫」を許されたことになる。この一回説はあり得ないことではないが、これに従うと木村庄之助とのバランスが崩れる。明治31年6月に木村瀬平は「真紫白」を請願していたのに、それを格上げし、「准紫」を授与しているからである。木村瀬平の「准紫」は木村庄之助より遅れて授与されたと見るのが自然である。

仮に木村瀬平が明治32年5月に准紫を許されたとすると、それは大橋編『相撲と芝居』(M33)の記述と矛盾する。なぜなら、木村瀬平は「真紫白」となっているからである。大橋編『相撲と芝居』によると、木村庄之助は特別な「紫」を使用している。それは木村瀬平より格上の「紫」に違いがない。すなわち、「准紫」である。このように見てくると、この『報知新聞』(M32.5.18)は木村庄之助の「准紫」と木村瀬平の「真紫白」を一括りにして「紫」と呼んでいることになる。

先ほど、木村庄之助は明治32年中に「准紫」になったはずだと指摘したが、この『報知新聞』(M32.5.18)に基づけば、32年5月だったことになる。木村瀬平の准紫に関して、32年5月とするにはやはり問題がある。明治33年に発行された大橋編『相撲と芝居』によると、木村庄之助だけが紫房である。

3. 15代木村庄之助の紫房

3.1 文字資料

15代木村庄之助が「准紫」を使用していたことは、明治30年の新聞記事で確認できる。

(a) 『読売新聞』(M30.2.10)の「式守伊之助と紫紐の帯用」

「(前略)この度行司式守伊之助は軍扇に紫紐を帯用せんとて裏面より協会へ申し出たりしに、協会においても紫紐房は木村庄之助といえども、房中に2, 3の白糸を燃り混ぜ帯用することなれば、たとえ伊之助が精勤の功に依りて許すとするも(後略)」

この記事では8代式守伊之助が「紫」を申請したことだけでなく、木村庄之助の「紫」には2, 3本の白糸が混じっていることも述べられている。

しかし、木村庄之助が「准紫」であることはわかっていても、いつからそれを使用していたかはわからない。この木村庄之助は明治23年頃にはすでに「紫」を使用していたことを確認できる新聞記事がある。また、錦絵では明治20年頃すでに紫を使用していたことも確認できる。

(b) 『読売新聞』（M23. 1. 19）の「相撲の古格」

「その免許は第一紫の紐房，第二緋，第三紅白にして，当時この紫を用いるは木村庄之助，緋色は式守伊之助，木村庄五郎（のちの木村瀬平：拙稿），同誠道，同庄三郎（5代：拙稿）の四名なり」

地位としての確定した立行司の房色は当時「赤」だったが、長年の精勤の功として特別に「紫」を許すことがあった。一種の名誉的なものである²⁴。それでは、いつその「准紫」が木村庄之助に許されたのだろうか。それを見ていくことにする。

15代木村庄之助が横綱梅ヶ谷の土俵入りを「紫」で引いていたとする新聞記事があるが、これが事実²⁵に即しているかどうかは疑わしい²⁵。

(c) 『日日新聞』（M32. 5. 18）の「相撲行司の軍配」

「(前略) 一昨年死去せし15代木村庄之助は同家より紫房の免^{ゆる}しをうけ、梅ヶ谷、西の海、小錦の三横綱を右の軍配にてひきしことあり。(後略)」

明治17年3月の天覧相撲で当時の木村庄三郎が横綱梅ヶ谷の土俵入りを引いたことは確かである²⁶。そのときの軍配房は「赤」だった。14代木村庄之助は「これより三役」の取組三番を裁いてはいるが、横綱土俵入りは引いていない²⁷。梅ヶ谷は18年5月場所を全休し、その場所後（厳密には12月）に引退している。その前場所、つまり1月場所では、木村庄三郎はその行司名のままで、まだ木村庄之助を襲名していない。木村庄三郎が木

村庄之助を襲名したのは18年5月場所である。この新聞記事にあるように、15代木村庄之助は横綱梅ヶ谷の土俵入りを引いていたことは事実だが、それは木村庄三郎を名乗っていたときであった。木村庄三郎を名乗っていたときは「赤房」であった²⁸。

明治25年の新聞記事でも15代木村庄之助が紫房を使用していたことは確認できる²⁹。

(d) 『読売新聞』(M25.7.15)の「寸ある力士は太刀冠に頭を打つ」

「本年4月下旬東京力士西の海嘉次郎が肥後熊本に赴き司家吉田追風より横綱および方屋入りの節、持太刀の直免許を受けたるにつき、行司木村庄之助(15代：拙稿)もこれにつれて司家より相撲故実三巻を授与し、特に横綱を率いる行司のことにしあれば、紫紐をも黙許されたるが(後略)」

なお、塩入(編)『相撲秘鑑』(M19.4, p.30)によると、15代木村庄之助は明治19年当時、朱房である。これが正しい記述だとすると、紫房になったのは少なくとも明治19年夏場所以降となる³⁰。

3.2 錦絵

当時の錦絵を調べてみると、15代木村庄之助は明治20年に「紫」を使用しているのが確認できる。

(a) 明治20年2月届、「華族会館角觥之図」(相撲博物館所蔵)、国明筆、松本平吉版。剣山と大達の実組で、木村庄之助は紫である。

(b) 明治21年4月届、「弥生神社天覧角觥之図」(相撲博物館所蔵)、国明筆、松本平吉版。一ノ矢と大鳴門の実組で、木村庄之助は紫である。

- (c) 明治21年12月届、「弥生神社天覧角觥之図」（相撲博物館所蔵）、国明画，松本平吉版。

剣山と西ノ海の取組で、木村庄之助は紫である。

この他にも、15代木村庄之助の紫が描かれた錦絵はいくつかある。ここでは、参考までに、二つ示す。

- ・ 明治23年，横綱西ノ海の土俵入りの錦絵で，画題はない（相撲博物館所蔵），春宣筆，松本平吉出版人。
露払いは千年川，太刀持ちは綾波，木村庄之助は紫である。
- ・ 明治25年，横綱西ノ海の土俵入りの錦絵で，画題はない（相撲博物館所蔵），春宣筆，松本平吉出版人。
露払いは千年川，太刀持ちは朝夕，木村庄之助は紫である。

これらの錦絵が示すように，20年代初期にすでに15代木村庄之助は「紫」を確認できるが，残念ながら，それが「准紫」だったのか，それとも「真紫白」だったのかは判別できない。錦絵でそれを判別するのは無理である。

3.3 異なる紫

「准紫」と「真紫白」の区別を知るには，文字資料に頼らざるを得ない。明治30年代に「紫」を許されたとする文献があるので，それがどの紫を指しているかを吟味してみよう。

- (a) 荒木著『相撲道と吉田司家』（S34）

「明治31年，15代木村庄之助に団扇の紐紫白打交を許す，これ団扇の紐紫白

「打交のはじめなり」(p. 200)³¹

(b) 枅岡・花坂著『相撲講本』(S10)

「団扇の紐紫白を吉田家より授くるということは、15代木村庄之助へ明治31年に初めてやったことで、(後略)」(p. 655)

この二つの文献によると、15代木村庄之助に「紫白」が許されたのは、「明治31年」となっている。この庄之助は30年9月に亡くなっているので、「31年」は明らかに間違いである。特に荒木著『相撲道と吉田司家』(S34)は吉田司家の資料を活用して著していることから、なぜこのようなミスが生じたのか不思議である。さらに不思議なのは「紫」ではなく、「紫白」を使用していることである。なぜなら、その「紫」はすでに9代木村庄之助、13代木村庄之助、6代式守伊之助にも許されていたからである³²。この「紫」は、実は、「准紫」のことを指しているかもしれない³³。

15代木村庄之助は明治30年以前から「真紫白」を使用していたことは、新聞記事や本などで指摘されている³⁴。「紫白」はすでにこれまでも他の立行司にも許されており、「紫白」が許された行司は15代木村庄之助が初めてではない³⁵。行司免許の「紫白打交紐」には「准紫」と「真紫白」があり、その「准紫」が15代木村庄之助に初めて許されたということを強調したかったのかもしれない。そうでなければ、首尾一貫した解釈ができなくなる。いずれにしても、「明治31年」という表現になっていることは単なるミスではなさそうである。他の多くの本でも押しなべて「明治31年」となっている³⁶。最近出版された吉田司家の25世追風(吉田長孝氏)の書いた本の中でも同じ「明治31年」となっている。

(c) 吉田著『原点に還れ』(2010)

「江戸時代は吉田追風家門弟である木村庄之助には、軍配の房の色は緋房『深

紅色』を授与していた。当時、紫房は禁色で、吉田追風家の団扇にだけ認められていた。その後、明治31年、15代木村庄之助に対し23世追風善門が初めて紫分の団扇として紫房を授与し、それ以降今日に至っている」(p.135)

吉田司家の25世追風の著書だけに「明治31年」も信頼したいが、先にも触れたように、やはりこれは間違いである。さらに、15代木村庄之助に授与された「紫」はその後そのまま継承されていると述べてあるが、これも事実に反する。15代木村庄之助の房には白糸が1本ないし3本くらい混じっていたからである。つまり、「総紫」ではなく「准紫」だったのである。16代木村庄之助と木村瀬平の房にも白糸が少し混じっていた。

吉田著『原点に還れ』(2010)の「紫」が白糸の混じった「准紫」を表わしているなら、これは解釈の相違によるものとすることもできる。しかし「それ以降今日に至っている」という表現になると、明治30年に「総紫」が授与され、それが現在に至っているという解釈しかできない。公式には、明治43年に木村庄之助の房色は「総紫」になっている。つまり、それまでは最高の房色は「准紫」だったが、それ以降「総紫」に変わったのである。もしかすると、吉田氏は明治30年に「総紫」を初めて15代木村庄之助に許したと勘違いしていたのかもしれない。ここではそれが明らかに勘違いであることを指摘しておきたい。

3.4 准紫

それでは、15代木村庄之助に「准紫」が授与されたのは、これらの文献が述べているように、「明治30年」だろうか。実は、今のところ、これを確認する資料は見つかっていない。従って、「明治30年」を肯定も否定もできない。しかし、明治30年ではなく、それ以前に授与された可能性を示唆する資料ならある。それをここで参考までに示す。

(a) 『読売新聞』(M30.2.10)の「式守伊之助と紫紐の帯用」

「東京相撲行司は古来それぞれの格式あり。土俵上、足袋、副草履または軍扇の紐の色取り、縮目熨斗目麻上下に至るまでも、肥後国熊本の司家吉田追風氏の許可を得るにあらざれば、協会といえど容易にこれを許可する能わざる例規なるが、この度行司式守伊之助は軍扇に紫紐を帯用せんとて裏面より協会へ申し出たりしに、協会においても紫紐房は木村庄之助といえども、房中に2、3の白糸を撚り混ぜ帯用することなれば、たとえ伊之助が精勤の功に依りて許すとするも、先ず行司全体より願い出たる上にて協議するのが至当ならんと、(後略)」

この新聞の日付を見れば、15代木村庄之助は明治30年1月に「准紫」を授与されたとするより「それ以前」にすでに授与されていたとするのが自然である。木村庄之助が長い間「紫」を使用していたので、式守伊之助もそろそろ「紫」を使用したくなかったに違いない³⁷。

(b) 『角力新報(3)』(M30.3)の「式守伊之助の紫房」

「これまで角力行司にて紫房の紐つきたる軍配を持つことを許され居りしは木村庄之助一人なりしが、今回式守伊之助も積年の勤労に依り紫房を使用するを許され(春：拙稿)興行7日目よりその軍配を用いたり」(p.50)

この雑誌記事でも木村庄之助がいつ「准紫」を授与されたかはわからないが、30年以前から使用していたことは「これまで」という表現から推測できる³⁸。明治30年代にはこの8代式守伊之助に「紫」が授与されたことを述べた新聞記事はいくつかあるが、15代木村庄之助の「准紫」を改めて授与したという記事はまったく見当たらない。このことは、15代木村庄之助が明治30年に「准紫」を授与されたとするのは疑わしいことを示唆している。さらに、8代式守伊之助の「紫」が「准紫」を意味しているなら、

木村庄之助が30年に「准紫」を授与されたとするのはもっと疑わしくなる。なぜなら、式守伊之助が「紫」を許されたのは30年春場所7日目（2月17日）だからである。8代式守伊之助が15代木村庄之助より先に「准紫」を授与されることはまずありえない。

木村庄之助が明治30年に「准紫」を授与されなければ、それでは「いつ」授与されただろうか。これに関しては、本稿では明確な答えを提示できない。その時期を特定することも推定できない。この時期を特定しようと明治期の文献を丹念に調べてみたが、残念ながら、満足の行く記述を見つけれなかった。錦絵も調べてみたが、「准紫」であれ「真紫白」であれ、すべて「総紫」に描かれている。「准紫」と「真紫白」の区別はまったくできなかった³⁹。

これまで見てきたように、15代木村庄之助の「准紫」については明治30年に授与されたとする文献がいくつかあったが、それが何を根拠にそのように指摘したのかははっきりしない。その根拠がわかれば、それが信頼できるかどうかを吟味すればよい。しかし、残念なことに、これらの文献ではその根拠が提示されていない。吉田司家の資料を活用して著してある本もあるが、それが事実を正しく伝えていない。少なくともそう判断したくなる内容になっている。同時に、「明治31年」という文言を見る限り、文献すべてが同じ「明治31年」となっていて、孫引きしたのではないかという印象を受ける。このように、15代木村庄之助の「准紫」を巡ってはいくつか疑問がある。そのため本稿では、残念ながら、いつ「准紫」が15代木村庄之助に許されたかを特定できなかった。

4. 14代木村庄之助の紫

4.1 御請書

13代木村庄之助と15代木村庄之助の「紫」は文献でもよく指摘されてい

るが、14代木村庄之助の「紫」となると、許されていなかったとするのが普通である。これは、たとえば、次の新聞記事でも見られる。

(a) 『報知新聞』(M32.5.18)の「行司の紫房、司家より庄之助らに許可」

「<行司紫房の古式> 相撲行司の所持する紫房は、古よりより難しき式法のあるものにて、これまでこれを許可されしは、13代木村庄之助が肥後の司家吉田追より許可されしを初めとし、これより後本式の許可を得たる者なかりしに、先ごろ死去したる15代木村庄之助が、再びその許可を得たり。(後略)」

(b) 『東京日日新聞』(M32.5.18)の「相撲行司の軍配」

「相撲行司の軍配は元来赤房が例なりしが、13代目木村庄之助のとき初めて肥後司家吉田追風のより紫白の免許を請け、鬘斗目麻上下は8代目式守伊之助のとき初めて同家よりの免^{しるし}を請けし次第にて、一昨年死去せし15代木村庄之助は同家より紫房^{ゆる}の免しをうけ、梅ヶ谷、西の海、小錦の三横綱を右の軍配にてひきしことあり。(後略)」

この二つの新聞記事によると、14代木村庄之助は「紫」を許可されていない。明治時代の新聞や本でもこの庄之助が「紫」を許されたとするものはない。この木村庄之助は本当に「紫」を許されていなかっただろうか。本稿では、「紫白」を許されていたことを指摘し、その根拠を二つ提示する。

(c) 明治15年7月付の「御請書」

「御請書」(M15)によると⁴⁰、吉田司家は14代木村庄之助に紫白の使用を認めている。協会が「御請書」を提出したとき、「紫」を非公式に許していたかどうかは定かでない。普通、協会が吉田司家に相談なく許可する

ことはないはずだが、当時の時代的背景を考慮すれば、協会が独自に判断したとも考えられる。吉田司家の当主は当時「西南の役」に関わっていて、相撲のことに集中する余裕などなかったかもしれないからである。いずれにしても、文書の形で協会は吉田司家に「御請書」を提出している。そしてその中で当時の木村庄之助に「紫白打交紐」を許可したことに対し感謝している。この「紫白打交紐」が「准紫」なのか、「真紫白」なのかはわからない。当時の文献でこの木村庄之助の紫について何も言及していないことから、「真紫白」だった可能性が高い。

4.2 明治11年から15年頃の錦絵

明治11年4月届け出の横綱境川土俵入りを描いた錦絵が二つあるが、木村庄之助の房色が違っている。一つは「紫」で、もう一つは「赤」である。どちらも絵師は国明である。

(a) 画題なし、国明筆、明治11年4月届出、露払いは勢、太刀持ちは手柄山、木村庄之助は「赤」（個人所蔵）。

(b) 画題なし、国明筆、明治11年4月届出、露払いは勢、太刀持ちは勝浦、木村庄之助は「紫」（個人所蔵）。

どちらが真実なのかわからない。この錦絵の絵師は国明本人でないかもしれない。当時でも、立行司の房色には敏感だったはずなのに、なぜこのように房色が異なるのか不思議である。もっと他の資料を参照し、本当の房色が何色であったかは判断しなければならない。

(c) 「^{てん}奠都三十年祭ノ図」、明治15年5月御届、国明画、楯山と梅ヶ谷の取組、木村庄之助は赤。（ピックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（1994, pp. 54-5）⁴¹）。

この錦絵では木村庄之助は赤で描かれている。国明が描いている錦絵では木村庄之助はほとんど「赤」になっている。赤と紫のうち、どちらが真実に近いかとなるが、赤ということになる。

錦絵や絵番付では木村庄之助は圧倒的に赤で描かれている。しかし、それは必ずしも正しくないかもしれない。なぜなら、明治15年7月の「御請書」があり、14代木村庄之助は契約が交わされた明治15年7月頃には紫房を使用していた可能性があるからである⁴²。もし14代木村庄之助が明治15年7月の「御請書」以前にも「紫」を使用していたならば、それは協会だけの許可を受けたものかもしれない⁴³。

4.3 明治17年の天覧相撲の錦絵

明治15年5月の絵番付（国明画）では「紫」で描かれている⁴⁴。このような「紫」を描いた錦絵や絵図を見ると、14代木村庄之助はやはり15年5月頃までにはすでに「紫」を使用していたかも知れない。しかし、明治17年3月の天覧相撲を描いた錦絵でも、木村庄之助の房色を「赤」で描いている⁴⁵。

- (a) 明治17年の届け出で、西ノ梅と大鳴門の取組を描いた錦絵（個人所蔵）では14代木村庄之助は「赤」である。絵師は国明、発行人は松本平吉である。届け出が何月かは不明だが、天覧相撲の後に描かれたようだ。

- (b) 明治17年3月の「天覧角觥之図」（明治18年5月届け出）、国明画、松本平吉出版人、剣山と大達の取組、式守伊之助は赤である。（『相撲百年の歴史』（p.18））。

この取組を実際に載いたのは、他の資料などからわかるように、14代木村庄之助である。式守伊之助は天覧相撲を欠場している（すでに死去）。錦絵の式守伊之助は木村庄之助の間違いである。なぜ行司名を間違えたかはわから

ない。この錦絵は明治17年3月の天覧相撲を描いたものではないのかもしれない⁴⁶。全体の状景や構図などがあまりにも違いすぎる。

- (c) 明治17年5月届,「御濱延遼館於テ天覧角觥之図」(相撲博物館所蔵),国明画,山本与市出版人。梅ヶ谷と大達を取組。木村庄之助は赤である。

このように房色が赤や紫の両方が混在していることから、錦絵ではどれが真実を反映しているのか判断できない。本稿では、明治15年7月付の「御請書」が真実であると判断している。この「御請書」は信頼できる文字資料だからである⁴⁷。錦絵で「紫」を描かなかったのは、たまたまその「紫」に気づいていなかったかもしれない⁴⁸。

この天覧相撲の錦絵で木村庄之助は常に赤だけで描かれているわけではない。紫で描かれたものもある⁴⁹。

- (d) 「勇力御代之栄」(国明画,個人所蔵)⁵⁰,梅ヶ谷と楯山の取組,木村庄之助は紫。

絵師の国明が確かに錦絵を描いてあるなら、木村庄之助の房色を間違えることはないはずだ。14代木村庄之助が天覧相撲で赤だったなら、御請書は効力のない文書だったことになる。また、紫だったなら、絵師の国明は真実を描いていないことになる。

5. 8代式守伊之助の紫

5.1 明治30年の紫

8代式守伊之助は明治30年春場所7日目(2月17日)に「紫」を許されている⁵¹。

(a) 『角力新報（3）』（M30.3）の「（8代：拙稿）式守伊之助の紫房」

「これまで角力行司にて紫房の紐つきたる軍配を持つことを許され居りしは木村庄之助一人なりしが、今回式守伊之助（8代）も積年の勤労に依り紫房を使用するを許され興行7日目よりその軍配を用いたり」（p.50）

(b) 『読売新聞』（M30.5.9）の「獅子王の軍扇」

「式守伊之助は伊勢の海五太夫と旧来の因みあり、かつ多年の勤功にて本年1月軍扇に紫紐を用いることを許されたるをもって旧の如く師子王の軍扇を携えたしと伊勢の海に請求し、横綱方屋入りを引くときのみ携帯するを許されたりとぞ」

この「紫」は「准紫」なのか、それとも「紫白」なのか、はっきりしな
いが、どうやら「紫白」だったようだ。

(c) 『読売新聞』（M30.2.10）の「式守伊之助と紫紐の帯用」

「東京相撲行司は古来それぞれの格式あり。土俵上、足袋、副草履または軍扇の紐の色取り、縮目髪斗目麻上下に至るまでも、肥後国熊本¹の司家吉田追風氏の許可を得るにあらざれば、協会といえど容易にこれを許可する能わざる例規なるが、この度行司式守伊之助は軍扇に紫紐を帯用せんとて裏面より協会へ申し出たりしに、協会においても紫紐房は木村庄之助（15代：拙稿）といえども、房中に2、3の白糸を撚り混ぜ帯用することなれば、たとえ伊之助が精勤の功に依りて許すとすも、先ず行司全体より願ひ出たる上にて協議するのが至当ならんと、協会員中1、2の意見を伊之助に示したるとかにて、同人もなる程とて、この程仲間に対してその賛成を求めしかば、庄之助、誠道、瀬平以下大いに内談を凝らしたる末、伊之助が出世に対し、故障を唱えるにはあらざるも、式守家が紫紐を用いたる先例は今より三代前の伊之助が特許されしより外さらになく、この時の如きも当時東に雲龍久吉という横

網ありたりしに、また西より不知火光右衛門現れ、東西横綱なりしたため、東は庄之助（13代：拙稿）これを引き、西は式守伊之助が引くという場合よりして、伊之助が紫紐帯用の許可を受けたるものなれば、今後誠道、瀬平、その他誰にもあれ、庄之助の名を継続したる場合には伊之助の上に立ちて、紫紐締め鬘斗目麻上下着用するに差し支えなくば、賛成すべしとの挨拶ありければ、伊之助の紫紐帯用は目下沙汰やみの姿なりという」

この記事では式守伊之助に紫房を許すかどうか話題になっているが、それから8日ほどのちの新聞記事を見ると、結果的に式守伊之助は紫房を明治30年2月17日（春場所7日目）に許されている。吉田司家もそれを了承したに違いない。これは、たとえば『読売新聞』や『東京朝日新聞』（共に明治30年2月18日）などでも確認できる。この式守伊之助の紫が15代木村庄之助と同じ准紫なのか、それとも紫白なのか、必ずしも明白でない。当時、式守伊之助は木村庄之助より下位としてみなされていたため、協会だけでなく、行司の間でも問題になったようだ。おそらく、この式守伊之助は准紫を許されていないはずだ。つまり、許されたのは紫白である。

8代式守伊之助は15代木村庄之助と年齢では4歳しか違わないが、15代木村庄之助には30年以前に「准紫」を許されているのに、8代式守伊之助にはそれを許すかどうかで話し合っている。その問題の一つは、おそらく、家柄の「差」である。

ときどき、「紫」は木村庄之助と式守伊之助に許されるというような文献を見るが、これは必ずしも事実を反映していない。というのは、「同じ」紫ではないからである。

(d) 綾川編『一味清風』(T3.10)

「紫房 これは吉田家特許の立行司で力士の横綱格であるから、(中略) 紫房は木村家に一人、式守家に一人の人物とせられている。紫房の立行司の申

でも吉田家から真に免許を得ないものは団扇の房に白糸を混ぜて使用するの
で、真の紫房は減多にない。」(p. 195)

「准紫」と「紫白」を一括りにして「紫」という場合、木村庄之助と式
守伊之助は確かに同じ「紫」だが、厳密には、二つの異種があった。

5.2 木村家と式守家

吉田司家は「紫」を許すとき、「紫白打交紐」という表現を使用していたが、それは白糸が混じった「紫」を意味していたに違いない。最初は「紫白」を許し、後に「准紫」を許すこともあった。この「准紫」は必ずしも木村庄之助だけに限定していなかったかもしれないが、時の経過の中でいつの間にか木村庄之助に限定されるようになったのかもしれない。明治初期には「准紫」が式守伊之助にも許されたかもしれない。これはあくまでも推測であるが、13代木村庄之助が「准紫」だったなら、6代式守伊之助も同じ「准紫」を臨時に許されたかもしれない⁵²。

吉田追風も新聞記事で木村家が式守家より上位であることを認めている。

(a) 『東京朝日新聞』(M41.5.19)の「行司木村家と式守家」

「現代の行司にして古実門弟たるは木村庄之助と式守伊之助となり。両人の位は庄之助が年長たると同時にその家柄が上なるを以て、先ず庄之助を以て上位とせざる可からず。軍扇に紫白の打交ぜの紐を付するはその資格あるしるしなり」

これには「紫」はなく、「紫白打交紐」とあるが、免許状でも一貫して「紫白打交紐」を使用している。木村庄之助が上位であることを認めているが、それがそのまま房色に反映していたかどうかは必ずしもはっきりしない⁵³。これも時代と共に変化した可能性がある。明治30年頃まではおそ

らく「紫白」を最初に許し、その後で「准紫」を許すという手順を踏んでいたようだ。立行司は頻繁に変わったわけでないので、「准紫」を許されたのがたまたま木村庄之助になっていたのかもしれない。明治37年頃でも、最初は「紫白」を許している。

(b) 『都新聞』(M37.5.29)の「紫白の房と上草履」

「行司式守伊之助は昨日より紫白混じり房、同木村庄三郎は土俵の上草履使用、いずれも協会より免されたり」

この「紫白混じり房」は免許状の決まり文句かもしれないが、明治37年頃には実際の房色をそのまま表現するようになっていたかもしれない。いずれ「准紫」になる可能性もあったが、時代はそれを許さなかった。上位の木村庄之助が「総紫」、下位の式守伊之助が「紫白」となったからである。「紫」は木村家と式守家に一人ということではなく、立行司にふさわしい行司なら、それを許すようになった。9代式守伊之助の次に「紫白」を許されたのは、木村庄三郎である。木村庄三郎には、明治38年5月、「紫白」が許されている⁵⁴。

6. 階級色としての総紫と紫白

明治41年の『東京朝日新聞』の「行司木村家と式守家」(M41.5.19)で「紫白打交紐」という表現を用いているように、少なくとも明治41年頃にはまだ「総紫」は使われていなかったはずだ。それまでは、「准紫」か「紫白」だった。「総紫」はおそらく明治42年6月の国技館開館後に使用し始めたのではないだろうか。行司装束の改正が話題になった頃に決まった可能性はある。明治43年の新聞記事ではすでに新しい階級色を報じている新聞記事がある。

(a) 『読売新聞』(M43.2.9)の「角界雑俎」

「鎧下の紐の色を軍配の房の色と同じように、紫は立行司、緋は緋房行司、白と緋混交(紅白:拙稿)は本足袋行司、萌黄に白の混交は格足袋行司というようにして段を分けている」

この記事では5月場所から袴を全廃することを述べているが、その時点では階級としての房色は決まっていたはずだ。立行司は木村庄之助であれ、式守伊之助であれ、「紫」となっている。しかし、これは、実際は、「紫白」と「総紫」を一括りにした表現である。木村庄之助と式守伊之助の軍配房色は違っていたからである。

(b) 『都新聞』(M43.4.29)の「庄之助の跡目」

「現在、庄之助・伊之助の格式を論ずれば、団扇の下紐において差異あり。庄之助は紫、伊之助は紫白打交にて庄三郎と同様なりと」

この記事でわかるように、庄之助は「紫」、伊之助は「紫白」である⁵⁵。庄之助の「紫」が「総紫」であることは述べられていないが、「紫白」と区別されていることから「総紫」を指しているに違いない⁵⁶。式守伊之助の「紫白」では紫糸と白糸の割合はわからないが、白糸が数十本混じったものだったに違いない。一見して、白糸が混じっていたことがわかったはずだ。それはおそらく従来の「真紫白」とほとんど同じだったはずだ。この「紫白」が明治37年5月に式守伊之助に、また明治38年5月に木村庄三郎にそれぞれ許されている⁵⁷。

木村庄之助は「総紫」、式守伊之助は「紫白」とそれぞれ区別されていたが、やはり両方を一括りにして「紫」と表現するのはその後も続いている。行司装束改正を報じている新聞記事ではすべて、立行司は「紫」となっている。その一つを示す。

(c) 『読売新聞』(M43.5.31)の「直垂姿の行司」

「露紐，菊綴は軍配の房の色と同じく階級に従い，紫，緋，紅白，青白に分かれ，(中略) 以前は立行司だけが小刀を帯したが，今度は足袋以上は鎧通しは左前半に帯することになる」

これは大正時代の『夏場所相撲号』(大正15年5月号)の「行司さん物語—紫房を許されるまで」(pp.102-5)にも見られる⁵⁸。

7. 今後の課題

本稿では，状況証拠に基づいて「真紫白」から「准紫」にいつ変わったかを調べたが，結局，明快な答えを提示できなかった。14代から16代の木村庄之助，6代木村瀬平，それから8代式守伊之助について，個々に答えを見つける努力をしたが，結果的に問題提起だけに終わってしまった。その主な原因は，おそらく，「真紫白」と「准紫」を明治43年以前，あまり厳密に区別することなく，一括りに「紫」と分類していたからであろう。それに，吉田追風の行司免許状における「紫白打交紐」が「真紫白」なのか「准紫」なのかも自明ではなかった。「准紫」を最初から授与されていたのか，それとも最初は「真紫白」，後に「准紫」を許されたのか必ずしも明白でない。今後はこれらの問題を再吟味する必要がある。

本稿と関連する問題点をここに指摘しておきたい。

- (a) 吉田司家が出している行司免許に「紫白打交紐」とあるが，それは「真紫白」だけを意味するのか。それとも「准紫」も含むのか。「真紫白」の場合，紫糸と白糸の割合はどうなっているか。
- (b) 本稿では「准紫」は「紫白」を最初に許され，後に「准紫」を改めて許されたという二回説に従っているが，それは事実を正しく反映しているだろう

か。もしそれが最初から「准紫」を許されていたという一回説に従うと、新聞記事や本の記述と矛盾する。それをどのように解決すればよいのか。

- (c) 16代木村庄之助と6代木村瀬平の「准紫」はいつ許されたか。
- (d) 15代木村庄之助は明治31年に「准紫」を許されたとする文献がいくつかあるが、それを支持する根拠にはどんなものがあるか。
- (e) 明治15年7月の「御請書」によれば、14代木村庄之助は「紫白」を許されているが、その「紫白」を使用していないだろうか。14代木村庄之助は吉田司家の許可を受ける前にすでに「真紫白」あるいは「半々紫白」を使用していなかっただろうか。
- (f) 本稿ではほとんど触れなかったが、13代木村庄之助は「准紫」を許されていないだろうか。「真紫白」のみを許されていたのだろうか。もし「准紫」を許されていたなら、それはいつ許されたのだろうか。
- (g) 本稿では「総紫」は明治42年ないし明治43年以降に許されたとしているが、それは正しいだろうか。16代木村庄之助はそれまでの「准紫」から「総紫」に変わったはずだが、改めて房色を変更する免許が授与されたのだろうか。それとも別の方法で変更したのだろうか。
- (h) 9代式守伊之助は明治37年5月、6代木村庄三郎は明治38年5月、それぞれ「紫白打交紐」を許されているが、それは「真紫白」と同じだろうか。つまり、現在の式守伊之助の「紫白」と同じだろうか、それとも異なるだろうか。
- (i) 本稿では9代式守伊之助と6代木村庄三郎は同じ「紫白」として扱っているが、本当に同じだったのだろうか。6代木村庄三郎は第三席の立行司である。木村庄之助と式守伊之助の房色が違っていただければ、式守伊之助と木村庄三郎の房色にも違いがあったかもしれない。

このように、具体的な問題をいくつか列挙したが、もちろん、もっと追加することもできよう。これらの問題のいくつかは本稿でも解決しようと

したが、力及ばず問題提起だけに終わってしまったものもある。これら未解決の問題がいつか解決されることを期待している。

主な参考文献

（新聞や雑誌等は本文中に記してある）

- 綾川五郎次（編），『一味清風』，学生相撲道場設立事務所，1914（T3）。
- 荒木精之，『相撲道と吉田司家』，相撲司会，1959（S34）。
- 大橋新太郎（編），『相撲と芝居』，博文館，1900（M33）。
- 上子司介，『相撲新書』，博文館，1899（M32）／復刻版，ベースボール・マガジン社。
- 北川博愛，『相撲と武士道』，浅草国技館，1911（M44）。
- 木村庄之助（27代，熊谷宗吉），『ハッケヨイ残った』，東京新聞出版局，1994（H6）。
- 酒井忠正，『日本相撲史』（上・中），ベースボール・マガジン社，1956（S31）／1964（S39）。
- 塩入太輔（編），『相撲秘鑑』，巖々堂，1886（M19）。
- 『相撲』編集部，『大相撲人物大事典』，ベースボール・マガジン社，2001（H13）。
- 出羽海秀光，『私の相撲自伝』，ベースボール・マガジン社，1954（S29）。
- 戸谷太一（編），『大相撲』，学習研究社，1977（S52）。「学研発行」と表す。
- 根間弘海，『大相撲行司の伝統と変化』，専修大学出版局，2010（H22）。
- 根間弘海，『大相撲行司の世界』，吉川弘文館，2011（H23）。
- 根間弘海，『大相撲行司の軍配房と土俵』，専修大学出版局，2012（H23）。
- 根間弘海，『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』，専修大学出版局，2013（H25）。
- 根間弘海，『大相撲行司の房色と賞罰』，専修大学出版局，2016（HH28）。
- ビックフォード，ローレンス，『相撲と浮世絵の世界』，講談社，1994（H6）。英語名：SUMO and the Woodblock Print Masters by Lawrence Bickford。
- 藤島秀光，『力士時代の思い出』，国民体力協会，1941（S16）。
- 枅岡智・花坂吉兵衛，相撲講本』（復刻版），誠信出版社，1978（S53）／オリジナル版は1935（S10）。
- 三木愛花，『増補訂正日本角力史』，吉川弘文館，1909（M42）／『相撲史伝』，1901（M34）。
- 三木貞一・山田伊之助（共編），『相撲大観』，博文館，1902（M35）。
- 吉田長善（編），『ちから草』，吉田司家，1967（S42）。
- 吉田長孝，『原点に還れ』，熊本出版文化会館，2010（H22）。

注

- 1 本稿は拙著『大相撲行司の房色と賞罰』（2016）の第2章「軍配の房色」と第3章「明治立行司の紫房」を深く研究したものである。その延長であると言ってもよい。

明治時代の紫房については拙著『大相撲行司の伝統と変化』(2010)の第4章「明治時代の紫は紫白だった」でも扱っている。なお、立行司の襲名期間に関心があれば、たとえば、『大相撲人物大事典』(ベースボール・マガジン社、2001)の「行司の代々」(pp.685-706)が参考になる。

- 2 紫房を「真紫白」と「准紫」に分けたり、いつ准紫が許されたかを特定しようとしたりすることはこれまでほとんど論じられることがなかった。これらの疑問に対する答えが自明だったわけではなく、そのような細かい疑問にあまり関心がなかったのである。本稿が初めてその答えを得ようとしたと言っても過言ではない。しかし、疑問を提示したもののそれに対する答えが出ているかとなると、多くの場合、未解決である。それを解決するには、今後の研究が必要である。
- 3 総紫と紫白房の場合、行司の階級と房色が一致したのは、公式には明治43年5月である。行司装束改正が行われたとき、房色と階級が一致するようになった。実際には、明治42年6月の国技館開館後から房色と階級の一致は検討されていたに違いない(たとえば『読売新聞』(M43.2.9)の「角界雑俎」や『時事新報』(M43.2.9)の「相撲界〈行司の装束〉」)が、それを明確に公的に示したのは明治43年5月の新聞報道である。明治43年の新聞を見ると(たとえば『都新聞』(M43.4.29)の「庄之助の跡目」)、立行司の紫房に差異があったことがわかる。
- 4 紫糸の中に白糸が1本ないし3本くらい混じっていたことは、たとえば『読売新聞』(M30.2.10)や三木・山田編『相撲大観』(M35, p.300)などでも確認できる。
- 5 藤島著『力士時代の思い出』(S16, p.87)にあるように、准立行司木村玉之助も「半々紫白」だった。大正時代の第三席の准立行司も、多くの場合、半々紫白だったはずだ。真紫白と半々紫白を区別することはほとんどなく、普通、一括りにして「紫白」と称されている。式守伊之助と木村玉之助は共に紫白である。
- 6 紫白房を協会が許すと言っても、吉田司家に何の断りもなく許すことはなかったはずだ。水面下で司家の許可を受けていたに違いない。吉田司家が正式な文書の許可を出さず、「黙許」として扱っていたかもしれない。それは横綱土俵入りを引くとき、臨時に一時的に許されていたかもしれない。臨時的な「黙許」が長期間に及んだかどうかはわからない。
- 7 16代木村庄之助に授与された免許状の写しは『東京日日新聞』(M45.1.15)の「明治相撲史—木村庄之助の一代」で見ることができる。この免許状は明治31年4月11日の日付になっている。16代以前の立行司の免許状の写しは確認できないが、おそらくすべて「紫白打交紐」あるいは「紫白紐」のような表現になっていたはずだ。たとえば9代木村庄之助は『角觥詳説活金剛伝』((蓬萊山改め)立川焉馬撰、文政10年校了、11年発行)では「吉田追風門人 無字団扇紫打交紐上草履免許」となっている。この「紫」は「紫白」の写し間違いかもしれない。紫にどの色を混ぜ合わせたのか不明だ。
- 8 『読売新聞』(M30.12.26)の「16代目木村庄之助の免許」の項では、16代木村庄之助誕生の経緯が述べられている。16代木村庄之助の立行司を協会が吉田司家に請願し、

その許可が12月中に下りたことである。その時に、房色の「紫」についても許されたかどうかははっきりしない。房色に関し吉田家から特別に許可がなかったとしても、協会と吉田司家の間では暗黙の了解があり、「紫」は許されていたに違いない。なお、『大阪朝日新聞』（M30.12.21）の「16代目木村庄之助」の記事には協会が木村誠道に庄之助襲名の免許が授与されたことが述べられている。これに先立って、『読売新聞』（M30.12.18）の「16代目庄之助の履歴」にあるように、木村誠道は庄之助名跡の辞令を協会から受けている。『読売新聞』（M30.12.26）の「16代目木村庄之助の免許」によると、吉田司家が16代木村庄之助を許可する文書が届いたのは12月26日である。当時、立行司の襲名にはいくつかの手続きが必要だった。

- 9 本稿では引用するとき、語句を現代風に変えることもある。たとえば、「総」は「房」に変えてある。また、説明の便宜上、同じ箇所を繰り返し引用することもある。同じ引用であっても、扱う内容が異なることがあるからである。
- 10 13代木村庄之助の紫はおそらく元治2年か慶応元年に許されている。どちらかといえば、元治元年冬場所である。というのは、元治元年3月の「勸進大相撲東西関取鏡」（国貞画、『江戸相撲錦絵』（S61.1, pp.146-8））では赤で描かれているが、元治元年春場所の絵番付「御免出世鏡」（景山著『大相撲名鑑』（p.20））では紫だからである。慶応2年3月の独り立ち姿（学研発行『大相撲』（p.127））ではすでに紫になっている。この13代木村庄之助の紫については、たとえば拙稿「江戸時代の行司の紫房と草履」（2013）でも少し詳しく扱っている。
- 11 三木著『増補訂正日本角力史』（M42）／『相撲史伝』（M34）でも、庄之助と伊之助は緋房の団扇を許されるが、「紫房は年功を積んだ後に許し、これを緋房の上に置きけり」（p.187）と述べている。さらに、「瀬平は庄之助、伊之助と相並んで草履、木剣、紫の格を有す」（p.187）とも述べている。その「紫房」が「准紫」なのか「真紫白」なのかはわからない。最初から「准紫」を許したという見方も可能である。
- 12 階級と房色が一致した明治43年以降であれば、一回説が正しい。しかし、それ以前の紫房は名誉的な色彩があったので、同じ立行司であっても同じ紫房を授与されるには限らなかった。たとえば木村庄之助でも紫房を授与される場合もあるし、そうでない場合もあった。授与される基準も明確に規定されていない。
- 13 本稿の赤房は「朱房」、「緋房」、「紅房」と同義で使用してある。現在の相撲規定では「朱房」となっているが、以前はどちらも使用されていた。
- 14 明治31年5月当時、9代式守伊之助の房色は「赤」だった。これは『読売新聞』（M30.2.20）の「相撲だより＜式守与太夫緋紐の事＞」で確認できる。赤は明治30年1月場所8日目から使用している。それまでこの式守伊之助は紅白だった。『読売新聞』（M34.4.8）の「木村瀬平以下行司の名誉」でも「赤」となっているが、それは追認したに過ぎない。式守伊之助を襲名した明治31年5月当時はもちろん「赤」だったので、6月に「紫白」を請願したはずだ。
- 15 この新聞記事では「紫白混じり」とあるので、「准紫」の可能性もまったく否定で

きないが、「真紫白」であるのは、第三席の木村庄三郎と同じ房色という他の新聞記事があるからである。『都新聞』(M43.4.29)の「庄之助の跡目」に「庄之助は紫、伊之助は紫白打交ぜにて庄三郎と同様なり」とある。この庄三郎は明治38年5月、「立行司」になった。残念ながら、明治38年当時の新聞記事では房色「真紫白」を確認できなかった。しかし、錦絵「横綱大砲土俵入之図」(明治38年5月5日印刷、玉波画、露払い・大戸崎、太刀持ち・太刀山)では紫で描かれているし、『都新聞』(M43.4.29)の記事では「真紫白」を確認できる。9代式守伊之助と6代木村庄三郎は明治37年以降、その房色「真紫白」は変化していないことになる。

16 この記述を見る限り、木村庄之助と木村瀬平は同じ准紫になっている。家柄の差は房色にまったく反映されていない。これが真実かどうかを確認するには、もっと他の確かな証拠がほしいのだが、今のところ、そのような証拠はない。それで、本稿では木村庄之助と木村瀬平は同じ准紫だったとしている。

17 この本は明治35年12月に出版されている。すなわち、少なくとも5月場所には木村庄之助は准紫であり、木村瀬平は紫白である。式守伊之助も「紫白」となっているが、それはミスの可能性がある。もしそれが正しいのであれば、『読売新聞』(M34.4.8)の「木村瀬平以下行司の名誉」や明治37年5月に「紫白」が許されたという記事などが間違っていたことになる。

18 本稿ではこの『相撲大観』にあるとおり庄之助と瀬平は同じ「准紫」だったとしているが、実際は白糸の割合が少し異なっていたかもしれない。庄之助と瀬平は家柄に差があったからである。庄之助と伊之助にも差があり、それは房色の差として反映されている。しかし、今のところ、庄之助と瀬平の「紫房」に微妙な違いがあったとする資料を見たことがない。瀬平は伊之助と比較すると、地位でも房色でも上位に位置づけられている。

19 この記事の「緋と紫の染め分けの房」というのは、おそらく「紫白」を指しているに違いない。赤でもないし、木村庄之助の准紫でもないからである。その中間にあるのは「紫白」しかない。本稿では、そのように解釈している。

20 木村瀬平も高級力士の一人だが、家柄も木村庄之助と同じかどうかははっきりしない。木村庄之助と同様に、紫房の中に白糸が1ないし3本混じっていたという記述もあるが、房色に全く違いがなかったかどうかを調べてみたほうがよいかもしれない。『東京朝日新聞』(M41.5.19)の「行司木村家と式守家」にあるように、木村庄之助が式守伊之助より家柄が上位だとする吉田追風の言葉もある。それは紫糸と白糸の割合にも反映しているかもしれない。木村瀬平の房色が木村庄之助と同等であったという記述もあるが、それが事実と一致するかどうかは吟味してみる必要があるかもしれない。もちろん、答えは簡単に得られないはずだ。活字資料が非常に乏しいからである。核心は、木村瀬平が「准紫」を許されたとき、それが16代木村庄之助の「准紫」とまったく同じだったかどうかということである。本稿では、一応、「同じ」だったという扱いをしている。

- 21 『時事新報』（M38.2.6）の「故木村瀬平の略歴」では、明治34年4月に許されたのは「紫白紐」となっている。もしこの時に房色が変わったなら、それが「准紫」であつたに違いない。吉田司家の「紫白紐」には「真紫白」と「准紫」があつたかもしれない。
- 22 立行司は吉田司家から「故実門人」を許されたりするが、それは紫房と別物である。そのため、本稿では故実門人を許された日付について言及していない。明治以降の立行司がいつ故実門人になったかについて関心があれば、たとえば吉田著『原点に還れ』（pp.118-20）、荒木著『相撲道と吉田司家』（pp.191-203）、吉田編『ちから草』（pp.123-35）などが参考になる。
- 23 式守伊之助の紫白房に関しては、不可解な記事もある。『東京日日新聞』（M32.5.18）の「相撲行司の軍配」の項に、「当時の式守伊之助は当春名古屋興行の折、同家（吉田司家：拙稿）より同じく紫房の榮譽を得て本場所には今度初めてこれを用いるにつき、本日自宅にて祝宴を催す由にて（後略）」とあり、式守伊之助は明治32年5月に紫白を許されている。これは協会の許しを受けずに吉田司家と直接交渉したのかもしれない。この記事は結果的に正しくないはずだが、祝宴を開いていることから吉田司家と何らかの同意があつたかもしれない。
- 24 「紫」が名誉的なものであつたことは、立行司になってもそれを自動的に許されていなかったことからわかる。これに関しては、多くの文献で指摘されている。江戸時代でも紫糸の中に白糸が混じると「総紫」にならないことから、最高位の行司やそれに近い行司はそれを「紫白」として使用している。紫白房の許可を与えるのは、吉田司家である。
- 25 この新聞記事の横綱梅ヶ谷の土俵入りを引いたということが事実を正しく反映していなければ、明治18年から15代木村庄之助が紫を使用していたとするのは必ずしも正しくない。当時の梅ヶ谷の横綱土俵入りを描いた錦絵では、木村庄之助は「赤」の場合もある。梅ヶ谷の横綱在位期間は明治17年2月から翌18年5月までである。
- 26 横綱土俵入りを引くには草履を履いていればよい。赤房でもよいのである。天覧相撲を描いた錦絵はたくさんあり、木村庄三郎が赤房で横綱土俵入りを引いているのがその錦絵で確認できる。
- 27 14代木村庄之助は体調がよくなかったが、それを押して出場している（松木平吉著『角觥秘事解』、明治17年、p.16）。そのために、横綱土俵入りは木村庄三郎が務めたようだ。
- 28 『読売新聞』（M30.9.24）の「相撲行司木村庄之助死す」の記事で15代木村庄之助が明治16年に「紫」を許されたかのような記述があるが、それはやはり正しくない。この記述は表現があいまいだが、「紫」が許されたのは「明治16年」ではなく、19年ないし20年である。もっと具体的には、19年5月場所か20年1月場所である。
- 29 西の海は明治23年3月に横綱免許を推挙され、明治25年4月に吉田家で免許を受けているが、その頃描かれている錦絵（露払いに朝夕、太刀持ちは北海、絵師は菱川）

の木村庄之助は紫房である。つまり、木村庄之助は明治23年頃すでに紫房を使用していた。実は、『読売新聞』(M25.6.8)の「西の海の横綱と木村庄之助の紫紐」にもあるように、この15代庄之助は明治25年以前から准紫を使っていた。これは本稿を書き終えた後でわかった。

- 30 塩入編『相撲秘鑑』(M19)によると、15代木村庄之助が紫房で描かれた錦絵が見つかるのは、明治19年5月場所か20年1月ということになる。明治18年以前に紫房の錦絵が見つかり、その描かれた時期を検討しなければならない。因みに、梅ヶ谷横綱土俵入りの錦絵(明治18年6月29日御届、国画画、出版人・山本与一、露払い・友綱良助、太刀持ち・大鳴門灘右エ門)では、木村庄之助は赤房である。
- 31 表現が少しあいまいだが、これが紫白打交ぜ紐の初めだったという意である。
- 32 9代木村庄之助の紫は錦絵「当時英雄取組ノ図」(国貞画)でも確認できる。その錦絵は、たとえば堺市博物館制作『相撲の歴史』(p.47)にもあり、東の方阿武松と西の方稲妻の取組を描いている。
- 33 明治31年(明治30年：拙稿)当時、「総紫」の房はなかった。紫白と准紫を一括りにして「紫」と表現することがあり、その見極めがときどき難しい。いずれにしても、当時は「総紫」はなかった。
- 34 『東京日日新聞』(M32.5.18)の「相撲行司の軍配」によれば、15代木村庄之助は明治18年頃には紫を使用していることになるが、その紫が本当に正しいのかどうかははっきりしない。先にも触れたように、明治19年当時、この庄之助は「赤」だった。もし明治30年に「准紫」を許されたなら、それまでの「紫」は「真紫白」だったことになるが、明治30年に「准紫」が授与されたかどうかははっきりしない。
- 35 木村庄之助(熊谷宗吉、27代)著『ハッケヨイ残った』(1994)の「歴代・木村庄之助」(新山善一筆、pp.212-5)にも紫房は明治31年、15代木村庄之助に初めて許されたと述べられている。これは明らかにミスである。紫の種類については言及されていない。
- 36 15代木村庄之助に「准紫」が許されたことを記述してある本はすべて、「明治31年」となっていることから、「孫引き」ではないかという疑問が生じる。誰が最初に「明治31年」と言い出しかははっきりしないが、明治44年の北川著『相撲と武士道』(M44)でも「明治31年」となっている。亡くなった後に「准紫」を許されたにもかかわらず、そのミスをどの本も修正していない。
- 37 この式守伊之助は長い間「赤房」で甘んじていた。木村庄之助の家柄が上位だという意識が強かったかも知れない。しかし、たとえ家柄が下位であっても、式守家の長として「紫」を使用したかったのではないか。これはあくまでも推測にしかすぎない。
- 38 新聞記事や雑誌記事からは式守伊之助に授与された「紫」が木村庄之助の「准紫」と同じもののなのか、それともその下位の「真紫白」だったのかははっきりしない。どれも「紫」となっているからである。8代式守伊之助は明治30年まで「赤」だった可能性が高いので、30年に授与された「紫」は、実際は「真紫白」だったと推定してい

- る。「真紫白」を経験せず、いきなり「准紫」を授与することはなかったはずだ。しかし、これはあくまでも推定であり、確かな根拠はない。
- 39 錦絵では房色の「赤」と「紫」は容易に識別できる。従って、時代の経過を反映するような錦絵を丹念に調べれば、「赤」から「真紫白」や「准紫」にいつ頃変わったかはある程度推測できる。ただ錦絵には同じところに描かれているにもかかわらず、「赤」と「紫」の場合もあるので、どれが真実かを錦絵だけでは判断できない場合もある。錦絵と文字資料を両方照合しながら、判断するのが賢明である。
- 40 この「御請書」は荒木著『相撲道と吉田司家』（pp.126-8）や吉田著『原点に還れ』（pp.34-6）で確認できる。木村庄之助は「紫白打交紐」となっている。明治15年には23世吉田追風が相撲協会や警視庁を訪問し、重要な文書をいくつか提出している。その中には「故実相伝又ハ免許スベキ条目」を含まれている。
- 41 英語の書名は Sumo and the Woodblock Print Masters (by Lawrence Bickford) である。
- 42 14代木村庄之助は明治14年1月に首席になっているので、その頃「紫白」を協会から許された可能性もある。首席だった6代式守伊之助は明治13年9月に亡くなっている。首席は紫白と決まっているわけではないので、14代木村庄之助はその頃でも「赤」だった可能性もある。
- 43 その場合は、もちろん、吉田司家の「黙認」ということになる。協会が吉田司家に何の伝達もなく「紫」を許すということは考えられないからである。吉田司家は公式の許可書を出さなかっただけであると、本稿では解釈している。
- 44 明治15年5月の絵番付は学研発行『大相撲』（p.132）に掲載されている。房色はやや不鮮明だが、「赤」でないことは確かである。明治13年5月の絵番付では木村庄之助は「赤」で描かれているので、その当時はやはり「赤」だったようだ。明治14年の絵番付はまだ確認していない。
- 45 14代木村庄之助は「従是取組」（これより三役の取組）で三番裁いている。天覧相撲の横綱梅ヶ谷土俵入りは、木村庄三郎が赤房で引いている。
- 46 まだ確認していないが、貴族の私邸で行われた天覧相撲の一コマかもしれない。そうであれば、行司名は式守伊之助でよい。8代伊之助なら、明治30年1月に紫を許された。それまでは赤だった。
- 47 本稿では「御請書」を信頼できる貴重な文字資料として扱っているが、明治時代の相撲関係の本はその存在についてまったく言及していない。当時の相撲協会と吉田司家との契約を文書化したものなので、それに基づいて房色は決まったはずである。
- 48 明治20年までは文字資料は非常に少ないので、錦絵に頼らざるを得ない。錦絵には同じ時期に描かれていても房色が違っていることがあるので、真実を見極めるには慎重な判断が必要である。
- 49 同じ天覧相撲の「楯山と梅ヶ谷の取組」を描いた錦絵「天覧相撲取組之図」（豊宣画、明治17年4月届け出）があり、木村庄之助は赤で描かれている（堺市博物館編

『相撲の歴史』(p.76))。

- 50 この錦絵「勇力御代之栄」には日付の記載が「明治十 年 月 日御届」とあり、必ずしも17年3月の天覧相撲ではないかもしれない。明治19年以前に描かれているなら、14代木村庄之助である。15代庄之助は20年頃に紫になっている。それ以前は赤である。
- 51 紫の使用は1月でなく、5月だとする新聞記事もいくつかある。たとえば、『都新聞』(M30.9.25)の「木村庄之助死す」や『大阪朝日新聞』(M30.12.21)の「式守伊之助死す」などでは、5月となっている。本場所初日から使用したのは5月だが、1月場所では途中(7日目)で許されている。
- 52 13代木村庄之助が「准紫」を許されたとする確証はない。「紫」が許されたとする文献や錦絵などはあるが、その「紫」が「准紫」だったという裏付けはまだ得られない。6代式守伊之助も横綱土俵入りを引くために臨時に「紫」を許されたとあるが、それが「准紫」だったのか「紫白」だったのかは判然としない。6代伊之助はずっと「紫」を使用してわけではない。たとえば、学研発行『大相撲』(pp.142-3)の錦絵「境川横綱土俵入り」(明治11年4月、国明筆)では、6代伊之助は赤である。
- 53 伝統的に木村庄之助が式守伊之助より上位だが、6代式守伊之助が明治10年1月から13年5月まで首席だったことがある。6代式守伊之助は明治13年9月に亡くなっている。式守伊之助が首席になったのは、この6代式守伊之助だけである。14代木村庄之助が首席になったのは明治14年1月である。木村庄之助が常に首席であることを文書化したのは、明治43年5月以降だったかもしれない。
- 54 これと矛盾する錦絵がある。明治34年2月1日印刷の錦絵「大相撲取組之図」(版元松木平吉、玉波画、国見山と荒岩の取組)では木村庄三郎が草履を履き、紫で描かれている。なぜ木村庄三郎がこのように描かれているか定かでない。
- 55 『時事新報』(M44.6.10)の「相撲風俗(8)-行司」の記事に「大関格は紫白、横綱格は紫」とある。そして進は紫白、庄之助と伊之助は紫房となっているが、この「紫白」が『都新聞』(M43.4.29)の「庄之助の跡目」の伊之助や庄三郎の「紫白」と同じかどうかは吟味しなければならない。庄之助と伊之助の「紫」に区別があったので、進の「紫白」が伊之助の「紫白」と同じでないことがわかる。おそらく、進の紫白は白糸の割合が多い「半々紫白」ではなかっただろうか。つまり、准立行司としての扱いである。これについては拙著『大相撲行司の房色と賞罰』の第3章でも少し触れている。
- 56 吉田司家の行司免許状では「紫白打交紐」がずっと使われていたが、これ以降それは使われなくなったはずだ。「総紫」には白糸が混じっていないからである。「紫白」は「総紫」と対比する房色になっている。
- 57 9代伊之助と6代庄三郎が同じ「紫白」だったことから、明治43年5月までは伊之助と第三席行司の房色は区別していなかったかもしれない。明治44年2月に木村進は「紫白」を許されたが、それはおそらく式守伊之助の「真紫白」と異なっていたはず

だ。進の房色は「半々紫白」である。式守伊之助の「真紫白」と木村進の「半々紫白」は明治43年以降に区別されていることになる。もし明治43年にも「半々紫白」があったなら、その適用基準は異なっていたはずだ。

- 58 立行司の木村庄之助と式守伊之助は一括りにして「紫」となっているが、准立行司は「紫白」となっている。これはおそらく「半々紫白」として立行司の「紫」と区別されていたに違いない。